

ドイツ諸ラント史辞典

— 中世から現在までのドイツ領邦と帝国直属家門 —

Historisches Lexikon der deutschen Länder

— Die deutschen Territorien vom Mittelalter bis zur Gegenwart —

7 改訂版 (C. H. Beck München 2007)

著者：ゲルハルト・ケブラー Gerhard Köbler

翻訳：鎌 野 多美子*

Tamiko Kamano*

現ドイツ連邦共和国は16のラントから構成されており、そのラントは自立した邦である性格が強い。もちろん国家の憲法や法はあるけれど、ラント独自の法律をもっている。現ラントはさかのぼれば、その規模こそ違いはあるが、中世のラントまでいきつく。中世から現在までの諸ラントと帝国直属の家門および身分、また都市と村落をあげ、その発生と変遷に光を当てている。これは、従来のドイツ史学術書の不足を補うものである。

2000年から2003年にかけて本学紀要に本書の6改訂版(1999年刊)の翻訳「ドイツ領邦史辞典」を掲載した。今回の翻訳は、最新の成果を踏まえた7改訂版(2007年刊)による新訳であり、タイトルも原題に即した「ドイツ諸ラント史辞典」とした。

概説

1 歴史の始まり

(1) 有史以前の時代

宇宙は100億年くらい前に未知の原因から誕生したものと推測できる。その宇宙のほんのひとかけらとして地球が誕生し、100万年くらい前に人類が誕生し、5000年程前から、文字の発明とともに人類の歴史を正確に知ることができるようになった。

(2) 原始

この時代にはドイツ人の直接の祖先は未だ大きな謎に包まれているので、かれらを学術的にのみ、推量できるだけで、またこの推量も、学術上「インド=ゲルマン語族」をもってしか命名できない。まだ文字もなく、後世に口伝承される過程で著しくそれぞれに変化していった、インド人やゲルマン人のように、現代の言語から推定されるこの民族は、狩りする者、木の実を採取する者、そして家畜を飼う者が生きるために保障のない移動をしていたスタイルを、確実にたくわえと、それによる生活の安定をもたらした農民の定住ス

*かまの たみこ：大阪国際大学現代社会学部教授〈2008.10.1受理〉

タイルと交換した、石器時代から金属器時代への過渡期に生きていた。この民族の故郷は、インド洋とバルト海のあいだのどこかの地域であろう。

この原住種族から、紀元前2000年以降、名のある個別の民族が生じた。たとえばシュメール人やエジプト人と同じように、すでに紀元前に、今日なお驚きに値する莫大な富をつくったインド人、イラン人、ヒッタイト人、ギリシア人、ローマ人である。その富でもって、前753年に建設されたと言われているローマの周辺に形成されたローマ世界帝国は、黒海から大西洋、そして北アフリカからドナウ川、ライン川、北西にある諸島にまで拡大した。

(3) ゲルマン人

ローマ人の北方の隣人、つまりドナウ上流域とライン下流域周辺に住んでいた人びとは、多くは、ケルト族の攻撃後、時期は定かでないが、バルト海沿岸に出現した諸民族または諸部族であった。かれらについては、前90年頃に初めて、古代人歴史家ポセイドニオス[前135-51頃]が、はっきりした名前は挙げていないけれど、ゲルマン人と証言している。かれらのうち、テウトニー族が、すでに前102年に南ガリアのアイクまで、前101年にキンブリー族が北イタリアのヴェルツェラエまで侵攻した。そこで、かれらはローマ人の軍隊と衝突した。とくにガイウス・ユリウス・カエサル（前44年没）とプブリウス・コルネリウス・タキトゥス（98年）[50頃-116年頃]は、各自それぞれの作品『ガリア戦記』『ゲルマニア』の中で、数多くの最小単位で組織化された、南から移動してきた、文字をもたないゲルマン諸部族の個人名や個別事情などを伝えている。かれらは、西暦84年以降にはすでに建設されていたリーメス（長城）がローマ人の支配していた地域への侵攻を何世紀も防いだので、進行方向を南東に避けなければならなかった。

(4) 民族大移動

375年に、中国やトルキスタンから追放されたフン族が、スカンディナヴィア半島から黒海周辺にたどり着いたゴート族を襲撃する中、かの有名なゲルマン民族大移動が開始した。この大移動期に、西ゴート族はガリアとスペイン、ヴァンダル族はビスワ川から北アフリカ、東ゴート族はイタリア、ユトラント族やアングル族やザクセン族はブリタニア、フランク族はガリア、そしてランゴバルド族はローマをめぐる戦争で全滅した東ゴート族の後継者としてイタリアへ侵攻した。この大混乱の真只中、476年に、西ローマ人の君主ロムルス・アウグストゥルスの廃位でもって、ローマ人による西部支配は終わった〔西ローマ帝国滅亡〕。

(5) フランク族の国

民族大移動期に最大の収穫を得たのは、258年にライン下流域に初めて出現してきたフランク族である。メロヴィング家出身で、フランク族の統一を果たしたフランク王クロトヴィヒ（クローヴィス）〔誕生466頃〕在位481-511〕は、486年に北ガリアのローマ人総督シアグリウス、496年にライン上流域とドナウ上流域のアレマン族、そして507年には南ガリア（アクイタニア）の西ゴート族を征服した。511年のクロトヴィヒの死後、531年にかれの後継者たちは、テューリングン族、続いて532から534年にブルグント族、それから少し遅れてプレアルプス山地の北側の（550年頃に初めて言及された）バイエルンの部族

を支配下に置いた。732年にフランク王国の王は、アルヌルフイング家の宮宰カール・マルテルを使って「トゥールーボワティエ間の戦い」で、北アフリカからスペイン、そしてフランク王国の心臓部へ侵入してくるアラブ人（イスラム勢力）の攻撃を阻止した。

イタリアの領地を贈物として十分見返りをもらった教皇から、承諾を得て、アルヌルフイング家の宮宰ピピンは751年にメロヴィング朝の王を制圧した（カロリング朝成立）。773ないし774年にイタリアのランゴバルド王国を征服したピピンの息子、カール大帝は、788年にバイエルン公タシロ3世を廃し（バイエルン大公領をフランク王国に併合）、772から804年（ザクセン戦役）の間にザクセン人を打倒（ザクセン全土をフランク王国に併合）したので、その結果、フランク王国はピレネー山脈からアイダー川、ドーヴァー海峡沿岸から中部イタリアまで拡大した。教皇レーオ3世[在位795-816]は、西ローマ帝国が滅亡してから300有余年経った800年のクリスマスの日に、カールをローマの聖ペテロ大聖堂で皇帝に戴冠し、ヨーロッパにおける主導権を獲得したフランク族の覇権の確立を象徴的に表した〔西ローマ帝国の復興〕。

(6) フランク王国の分割

はやくも843年にカール大帝の子孫たちは、メロヴィング家を手本にして、870年と879ないし880年に、ガロ・ロマン語族、ブルグント族、アレマン族、フリーゼン族、ザクセン族、テューリンゲン族、バイエルン族、ランゴバルド族、イタリア・ロマン族を含む、公領の大公、伯領とガウの諸伯の支援でもって支配していたフランク族の王国を、細かく分割した。その際にライン川・エルベ川間、北海・アルプス間の、東側の人びと（とくにフランク族、アレマン族、バイエルン族、テューリンゲン族、ザクセン族、フリース族）は、統合された。かれらは、ゲルマンあるいはゲルマン人の民族語（古高ドイツ語のディオト「民族」由来のディオテイスク）を使用し、それによって西のフランス・ロマン語地域の人びと、南のイタリア・ロマン語地域の人びととははっきり区別されていた。ロータルの遺領の分割時、東フランク王国は西へ、つまりマーストリヒト、トリーア、メッツ（メス）まで拡大した。

(7) ドイツ王国

911年に東フランク系カロリング家の男系血統が断絶し、その後、フォルヒハイムの諸侯会議でフランク人のコンラート家のコンラート1世〔在位911-918〕が国王に選出され、そのコンラート1世の死後、919年にザクセン家オットーの息子ハインリヒ1世〔皇帝在位919-936〕が国王に選出され、短期間に、全く新しい政治的統一すなわち「ドイツ王国」ができた。そのドイツ王国は、もはやフランク族の通過地ガリア（フランス）を含まないが、はやくもハインリヒ1世下でシュルデ川とマース川上流辺境に西国境を確定した。そしてオットー大帝〔国王936、皇帝位962-973〕治下の955年にレヒフェルトの合戦でハンガリー人の侵攻を阻止し、962年にはランゴバルド王国またはローマまでのイタリア（帝国直轄イタリア）を奪還した。その後、ドイツ王国は、最終的に、ゲルマン人（西ゴート族・ヴァンダル族）の退却後、その間にスラヴに入植していたエルベ川対岸の東部へ食指を動かし、ザーリアー朝最初の国王コンラート2世の下〔在位1024-39〕での1032から1033年に、（3番目の）王国としてのブルグントを加えた。

帝国内を皇帝宮から皇帝宮へと移動しながら行政していた王は、自らがレーンを授与した（たとえばフランケン、シュヴァーベン、バイエルンあるいはザクセン）諸公や諸伯により、多種多様な困難に晒されていた。それゆえに、ザクセンのオットーたち〔リウドルフ・オットーネン〕つまりオットー1・2・3世たちの死去と1024年のハインリヒ2世死去で、ザクセン朝男系血統が断絶したので、かれらを継承したザーリアー家は、大司教や司教また大修道院長を自ら（オットー-ザーリアー家の教会組織）の権力の中へ組み入れるようになった。それによって皇帝ハインリヒ4世〔在位1084-1106〕と教皇グレゴリウス7世〔在位1073-1085〕とのあいだに高位聖職者の任命権を巡る叙任権闘争（1075-1122年）が勃発し、その闘争の終りには、聖職者で、王に直属のドイツ帝国諸侯が数多く出現した。

2 選帝諸侯領、帝国諸侯領、帝国都市、中世中期と中世後期の帝国騎士と帝国村落

(1) 選帝諸侯領

嗣子のいないザーリアー朝最後の王ハインリヒ5世〔在位1106-25〕が死去した1125年、世俗の実力者たちは、教皇の強い影響下、教皇の対立者として、東部開拓（メクレンブルク、ポメルン、のちにシュレージエン）を再び始めたザクセン公（1106年）ズップリンブルク（ジュップリンゲンブルク）家ロータルを選出した。それに対して、はやくも1127年にザーリアー朝の国王ハインリヒ4世〔在位1056-1106〕の孫として、シュタウフェン家コンラート3世が、対立国王として擁立された〔1135年まで対立国王〕。息子のいなかったロータル3世が死亡した（1137年）ので、1138年に、ロータルと対立関係にあった若干の侯たちは、トリアー大司教の薦めで、シュタウフェン家コンラートを国王に選出した。なぜなら、ズップリンブルク家ロータルから推薦されていた、ロータルの娘婿でバイエルン公でありザクセン公でもあったヴェルフェン家出身のハインリヒ傲岸公（デア・シュトルツェ）は、合計すれば4つある大きな公領の内の2公領を所有していたので、ローマ教会とドイツ諸侯には強敵と映ったのである。新しく承認された王として、コンラート3世は、徹頭徹尾ヴェルフェン家の力を半減させるため、バイエルン人（部族）の公領を剥奪し、それを、1139年に異母兄弟であるバーベンベルク家レオポルト4世にレーンとして授与した。1156年にコンラート3世〔1152年没〕の後継者、シュタウフェン家のフリードリヒ1世バルバロッサ〔在位1152-90〕は、和解目的のため、ザクセン人（部族）の公領を所有している従兄弟のヴェルフェン家ハインリヒ獅子公〔ザクセン公在位1142-80〕に、バイエルンを再び返還した。しかし、その時、バイエルン南東部に位置するオーストリアをバイエルン部族公領から切り離し、それを、独立した領国、つまり、もはや一民族や部族からの影響を受けない公領、オーストリアに格上げした。バルバロッサは、イタリア遠征時に、バイエルン公であるハインリヒ獅子公〔バイエルン公在位1156-80〕に援軍を要請したが、かれにこれを拒否されたので、1180年、獅子公と決着をつけようと両公領（バイエルンとザクセン）だけでなく、ザクセン人（部族）の公領も、同じやり方で、領土的公領に分割した。そして、残った公領（レスト-）ザクセン（ヴェストファーレン抜き）をアスカニアー家に、（レスト-）バイエルン（オーストリアとシュタイアーマルク抜き）

をヴィッテルスバッハ家に与えた。その結果、(バイエルン人とザクセン人)の大部族領の代りに、住人による独立をした小さなラント(バイエルンとザクセン)が出現した。昔からの原則「分割せよ、そして与えよ」に従って、王は根本的な危険から解放されたのである。

同じ時期に、逆にまた、領邦君主から支援された考え、最上級レーン君主として王はレーンが返還された際これを保持してはならないという考えは、もちろん重要性を増した。保持してはならないというより、むしろ王は返還されたレーンを、新たに封臣^{レームスマン}に与えなければならなかった。その結果、イングランドやフランスと違って、王が自らの手中にある財を蓄積することは阻止され続けたので、帝国諸侯も王から脅かされる危険性を少なくできた。

その上、諸侯にとって好都合だったのは、結婚によってノルマン人のシチリアを獲得し、1196年3月にドイツ王国を世襲君主制に変える「世襲帝国計画」を諸侯に提案したシュタウフェン家の皇帝ハインリヒ6世〔在位1191-97〕が、1197年に32歳という若さで死んでしまったことである。そこでハインリヒの弟フィリップ・フォン・シュヴァーベンがシュタウフェン派諸侯によって国王に選出されるが、反シュタウフェン派のケルン大司教アドルフの仕掛けで団結した諸侯は、ハインリヒ獅子公の第二子、ヴェルフエン家のオットー4世〔国王在位1198-1215、皇帝在位1209-15〕を対立国王に擁立した。しかし、そこからは何も生まれなかった。その後まもなくシュタウフェン家のフリードリヒ2世〔国王在位1212-50、皇帝在位1220-50〕治下、王選出をする7人の諸侯として、マインツ大司教、ケルン大司教、トリーア大司教、バーメン王、ライン宮中伯、ザクセン公、ブランデンブルク辺境伯が登場した。これら7人の選帝諸侯が、完全に独立して、神聖ローマ帝国の終焉まで王選出をすることとなり、かれらは1356年に長男子相続制の特権、(上級裁判所への)不召喚特権、同じく不上訴特権を、ルクセンブルク家のカール4世〔皇帝在位1354-78〕の金印勅書に書き記させることに成功した。

シュタウフェン朝後の時代に、王位を占めようと、とくにルクセンブルク家、ハーpsブルク家、ヴィッテルスバッハ家の一門が勢力争いをした。かれらのうちルクセンブルク家が1327年、1339年、1348年とシュレージエンをポーランドからバーメンへ移したので、その結果、シュレージエンはドイツ帝国へわたった。ルクセンブルク家滅亡後、ハーpsブルク家がルクセンブルク家の遺領を引き継いだ。

(2) 帝国諸侯^{ラント}の領邦

世襲君主制反対や、少数の主導的立場の一門が選出する選挙君主制賛成に関係なく、一般的に帝国の領邦化は急速に進んだ。色々な理由から、その時々の一門の状態に関連して、短期間に、様々に分裂したラントの領地が生まれた。すでに中世中期には100以上の帝国諸侯が数えられたが、その約四分の三は聖職に就いていた。

その人数の多さのために、かれらの支配領域は、大抵は小さかった。それゆえ、王にとって個別的には帝国侯はもはや危険の対象でなくなった。ただ、帝国諸侯は団結してのみ、ことに帝国等族として(王や)選帝諸侯と並んで勢力を維持することができた。

かれらの関心の主要な対象はもはや帝国でなかった。むしろ、かれらには自分の所有地

を増やすことのほうが重要だったのである。この点で、1282年にハーブスブルクのルードルフ王〔在位1273-91〕が息子にオーストリアをレーンとして授与したこと、1417年にジューギスムント王〔在位1411-37〕が王宮軍隊の最高指揮官であり顧問官でもあった城伯ホーエンツォレルンのフリードリヒに選帝資格をもつブランデンブルク辺境伯領をレーンとして授与したことは、明らかに重要な決定であった。一方で、数多くの遺領分割によってルードヴィンガー家のテューリンゲン（1247年から64年）とアスカニア家のザクセン（1423年）がヴェッティン家にわたったが、一般的には影響はなかった。

（3）帝国都市

七つの分割不可の選帝侯領と、最小に分割された侯領の支配下に入れられたその他の帝国諸侯のラントと並んで、11世紀末以降、商工業により興隆した諸都市が、独自の勢力を得るための力として出現してきた。都市の多くでは、市民は聖職者である都市君主に自分たちの権利を認めさせた。それと並行して、王支配下にある都市の市民は、とくにシュタウフェン朝崩壊（1254年）からハーブスブルクのルードルフが王に選出されるまでの（1273年）空位時代以降、帝国に直属する地位（帝国都市）をしだいに獲得した。合計125ほどの都市がそれに成功し、直属の地位であった間は、多かれ少なかれうまくいっていた。

（4）帝国騎士

選帝諸侯とその他の帝国諸侯や帝国都市に比べて、中世後期（1422年、1495年）以降登場し、その存在が16世紀前半とくに1540年頃から明確になり、（とは言え）大部分が帝国家人の出である帝国騎士は、重視されなかった。しかし、かれらは、帝国が近代初期（1500ないし1512年）に帝国クライスに分割されるのと並行して、次第に独自の組織をつくるのに成功した。この帝国クライス制の中で、エーヒンゲンの議席をもつシュヴァーベン騎士クライスは、ドナウ・カントン（エーヒンゲン）、ヘーガウ（ラードルフツェル）およびアルゴイ-ボーデンゼー（ヴァンゲン）をともなったヘーガウ・カントン、ネッカー（シュヴァルツヴァルト、オルテナウ村落）（テュービンゲン）・カントン、コヒャー（エスリンゲン）・カントン、クライヒガウ（ハイルブロン）・カントンを、フランケン騎士クライスは、オーデンヴァルト（ハイルブロン、次にコヒェンドルフ）・カントン、シュタイガーヴァルト（エアランゲン）・カントン、ゲビルク（バンベルク）・カントン、アルトミュール（ヴィルヘルムスドルフ）・カントン、パウナハ（ニュルンベルク）・カントン、レーン-ヴェラ（シュヴァインフルト）・カントンを、同じくライン（ライン流域）騎士クライスは、オーバーライン流域（マインツ）・カントン、ミッテルライン流域（フリートベルク）・カントン、ニーダーライン流域（コブレンツ）・カントンを包括していた。それと並行してウンターエルザスとフォークトランツの騎士は、互いに密接に関係しているものとして理解されていた。

帝国騎士を軽視できないのは以下のことから分かるであろう。非常に変則的であり、文献的には十分研究されていないのが帝国騎士であるが（その騎士については一般的に知られている文献からはみ出て一族の名を挙げることに、また領土的統一性をすべて挙げる必要であるように思われるが）、1790年にシュヴァーベンには140の帝国騎士の一族と16

万の人口そして70平方マイルの面積を占める約670の騎士領、フランケンには150の一族と20万の人口そして80平方マイルの面積を占める約700の騎士領、ラインには60の一族と9万の人口そして40平方マイルの面積を占める約360の騎士領が挙げられている。これらの数字は、人口約45万と200平方マイル弱の地域ケピート（別の見積りでは人口20万で100平方マイル強）を含む（1475年まで）1730ほどの領土テリトリウムから、出ているものと思われる。これらは主として1805ないし1806年に皇帝直属の地位を剥奪された。ということは、地方領主に隷属させられた。それらはすべて、ドイツ帝国議会での議席を有していなかったにもかかわらず、帝国に直属する領主の独自の地域を形成していた。したがって、それらがドイツの諸領邦ラントについての概説の中で、領土に関する側面からであっても、人的側面からであっても、取り上げられているのは当然のことである。

(5) 帝国村落

それに対して、さほど重要でなく、その数も多くない、しかし大抵は古い帝国領に由来する、つまりドイツ帝国議会での議席を有しないが帝国に直属するという帝国村落もここに記載しておく。それらは中世中期に120ほどあったと報告されているが、13世紀以降、次第に帝国から消失した。その120には若干の大きい市場フレッツのある帝国村、帝国農場、そして自由人が含まれる。その内の僅か（例えばゴッホスハイム、ホルツハウゼン [ブルクホルツハウゼン]、ゼンフェルト、ゾーデン、ズルツバッハ、ロイトキルヒャー、ハイデ）は、神聖ローマ帝国の終りまで存続していた。

(6) 君主（領主）

三つの帝国直属身分（選帝諸侯・帝国諸侯・帝国都市）と、ドイツ帝国議会での議席は有しないが帝国直属身分である二つのグループ（帝国騎士・帝国村落）と並行して、なおも数多くの帝国直属でない政治的な単一体があげられる。それらは、たいてい多種多様で複雑な君主概念でもって叙述される、ドイツ領邦史の要素を構成している。その上、それらは大抵、様々に、帝国直属と実によく似ている。しかも多くの場合、帝国直属の法的地位もずっと議論の対象になっている。

(7) 肩書きだけの諸侯

ドイツ帝国議会での議席は、カール4世（1316-78）が導入した位記貴族（肩書のみを所有していた名目だけの貴族）もまた有していなかった。しかし事実関係のために、名目上の肩書所有の帝国諸侯についても、少なくともここに言及しておくことにする。

3 近世（初頭）の神聖ローマ帝国

(1) 近世への過渡期の帝国構成員

中世末期から近世への過渡期に出現した、必ずしも信頼できるとは言えない一覧表は、13世紀後期以降神聖ローマ帝国と呼ばれている、西ではフランスから、東ではトルコないしオスマントルコ人から襲撃され形づくられた、産物の領邦化の結果として、327（ないし328）の構成員を挙げている。これら構成員として選帝諸侯6人、ドイツの聖職 [教会] 帝国諸侯43人と世俗帝国諸侯29人、ロマン語地域の世俗帝国諸侯3人が言及されている。その他に、伯と領主あわせて118人、高位聖職者と女子大修道院長あわせて50人、4つの

ドイツ騎士団管轄区域、そして74の都市が記載されている。実際には、この時代に帝国構成員の数はおよそ420もあった。

(2) 1521年のライヒスマトリーケル（帝国租税台帳）

近世初頭に実務目的で作成された1521年の帝国租税台帳には約400（384ないし392）の構成員の名が挙がっている。そこに登録されていた名は7人の選帝侯、3ないし4人の大司教、45ないし47人の司教、31人の世俗諸侯、65人の高位聖職者、13ないし14人の女子大修道院長、ドイツ騎士団の4つの管轄区域、140ないし137人の領主と伯、同様に84の自由都市と帝国都市である。これらの数は1776年まで、帝国によって帝国の都合のよいように、たえず帝国の立場から記されてきた。但し、その際、もちろんイタリアに対する現実支配はすでに中世中期以後日増しに弱くなり、1517年のマルティン・ルターの宗教改革によって消滅し最終的にはフランスとスウェーデンの決定的な関与の下での三十年戦争（1618-48年）でとことん争われた北方プロテスタントと南部カトリックとの宗教対立は、おそくとも1648年のミュンスターとオスナブリュックの二つの講和条約から成っているヴェストファーレン講和条約ののち、アルプス北部の皇帝と、多くの国境（スイス、エルザス、北ネーデルラント [オランダ]、プレーメン、フェアデン、フォアポメルン、ヴィスマール）での損失によって狭くなった帝国を、ラント（領邦）と領邦君主に対して、ますますはつきりと後退させた。

(3) 帝国等族

それでも1792年には、1667年に有名な国法学者サムエル・プーフェンドルフが「不規則的存在であって妖怪に似たるもの」と断言したドイツ帝国の国制について、帝国合議体順に書かれた一覧表が出された。

選帝諸侯合議体は、1 マインツ大司教、2 トリーア大司教、3 ケルン大司教、4 ベーメン王、5 ライン宮中伯（ないしはバイエルン公）、6 ザクセン選帝侯、7 ブランデンブルク選帝侯（1618年以降は同君連合において残ったドイツ騎士団のラントから形成された公領プロイセンの公でもあり、1701年からはプロイセン王）、8 ブラウンシュヴァイク-リュネブルク公（1692年以降）から、構成されていた。

帝国諸侯合議体は聖職座と世俗座で構成されていた。

聖職座の内訳は、1 オーストリア公（1477から1493年までブルグント [プロヴァンスとダウフィン抜き] の相続人、1526年以降ベーメンとハンガリーの王でもある）、2 ブルグント公、3 ザルツブルク大司教、4 ブザンソン大司教、5 騎士団総長兼ドイツ騎士団長、6 バンベルク司教、7 ヴュルツブルク司教、8 ヴォルムス司教、9 アイヒシュテット司教、10 シュパイアー司教、11 シュトラースブルク司教、12 コンスタントツ司教、13 アウクスブルク司教、14 ヒルデスハイム司教、15 パーダーボルン司教、16 フライジング司教、17 レーゲンスブルク司教、18 パッサウ司教、19 トリエント [トレント] 司教、20 ブリクセン司教、21 バーゼル司教、22 ミュンスター司教、23 オスナブリュック司教、24 リエージュ [リュッティヒ] 司教、25 リューベック司教、26 クーア [チューア] 司教、27 フルダ大修道院長、28 ケンプテン大修道院長、

29 エルヴァンゲン司教座聖堂首席司祭、30 ヨハニター—マイスター大修道院長、31 ベルヒテスガーデン司教座聖堂首席司祭、32 ヴァイセンブルク司教座聖堂首席司祭、33 プリューム大修道院長、34 シュタプロ大修道院長、35 コルバイ大修道院長、36 シュヴァーベン地方の高位聖職者たち、37 ライン地方の高位聖職者たちである。

以上のうち36と37は、1から35までが単独票であるのとは対照的に、複数の投票有権者が集まって一票分と認められる共同票である。

36（シュヴァーベン地方の高位聖職者たち）の内訳は、大修道院長および高位聖職者、女子大修道院長である。大修道院長および高位聖職者の内訳は、1 ザーレム、2 ヴァインガルテン、3 オクセンハウゼン、4 エルヒンゲン、5 イルゼー、6 ウーアスベルク、7 カイスハイム（1756年）、8 ロッゲンブルク、9 ロート、10 ヴァイセナウ、11 シュッセンリート、12 マルヒタール（-オーバーマルヒタール）、13 ペータースハウゼン、14 ヴェッテンハウゼン（1566年、それ以前は帝国騎士領）、15 ツヴィーファルテン（1749年）、16 ゲンゲンバッハ（1751年）、17 ネーレスハイム（1766年）のそれである。女子大修道院長の内訳は、18 ヘックバッハ、19 グーテンツェレ、20 ロッテンミュンスター、21 バイント、22 ゼフリンゲン（1775年）、23 ザンクト・イエルゲン・ツォー・イスニー（1782年）のそれである。

37（ライン地方の高位聖職者たち）の内訳は、1 カイスハイムの大修道院長、2 コブレンツ騎士団管轄区域、3 エルザス・ウント・ブルグント騎士団管轄区域、4 オーデンハイム・ウント・ブルックザール、5 ヴェアデン、6 アウクスブルクのザンクト・ウルリヒ・ウント・ザンクト・アフラ、7 イスニーのザンクト・ゲオルゲン、8 コルネリミュンスター、9 ザンクト・エメラム・ツォー・レーゲンスブルク、10 エッセン、11 ブーヒャウ、12 クエドリンブルク、13 ヘルフォルド、14 ゲルンローデ、15 レーゲンスブルクのニーダーミュンスター、16 レーゲンスブルクのオーバーミュンスター、17 プルトシャイト、18 ガンダースハイム、19 トルンの高位聖職者である。

世俗座の内訳は、1 バイエレン、2 マクデブルク、3 プファルツ（カイザース-）ラウテルン、4 プファルツ-ジメルン、5 プファルツ-ノイブルク、6 プレーメン、7 プファルツ-ツヴァイブリュッケン、8 プファルツ-ブエルデンツ、9 ザクセン-ヴァイマル、10 ザクセン-アイゼナハ、11 ザクセン-コーブルク、12 ザクセン-ゴータ、13 ザクセン-アルテンブルク、14 ブランデンブルク-アンスバッハ、15 ブランデンブルク-クルムバッハ、16 ブラウンシュヴァイク-ツェレ、17 ブラウンシュヴァイク-カーレンベルク、18 ブラウンシュヴァイク-グルーベンハーゲン、19 ブラウンシュヴァイク-ヴォルフエンビュッテル、20 ハルバーシュタット、21 フォアポメルン、22 ヒンターポメルン、23 フェアデン、24 メクレンブルク-シュヴェーリン、25 メクレンブルク-ギュストロー、26 ヴェルテンベルク、27 ヘッセン-カッセル、28 ヘッセン-ダルムシュタット、29 バーデン-バーデン、30 バーデン-ドゥアラッハ、31 バーデン-ハッハベルク、32 ホルシュタイン-グリュックシュタット、33 ザクセン-ラウエンブルク、34 ミンデン、35 ホルシュタイン-オルデンブルク、36 サヴォイア、37 ロイヒテンベルク、38 アンハルト、39 ヘンネベルク、40 シュヴェーリン、41 カミン、42 ラ

ツェブルク、43 ヘアスフェルト (ヒルシュフェルト)、44 ノメニー、45 メムベル
 ガルド、46 アーレンベルク、47 ホーエンツォレルン、48 ロブコヴィッツ、49 ザル
 ム、50 デイートリヒシュタイン、51 ナッサウ-ハダマール、52 ナッサウ-ディレンプ
 ルク、53 アウアーシュベルク、54 東フリースラント、55 フェルステンベルク、56
 シュヴァルツェンベルク、57 リヒテンシュタイン、58 トルン・ウント・タクシス、59
 シュヴァルツブルク、60 ヴェッテラウ地方の諸伯、61 シュヴァーベン地方の諸伯、62
 フランケン地方の諸伯、63 ヴェストファーレン地方の諸伯である。

以上のうち60から63は、1 から59までが単独票であるのとは対照的に共同票である。

60 (ヴェッテラウ地方の諸伯) の内訳は、1 ナッサウ-ウージンゲン、2 ナッサウ-
 ヴァイルブルク、3 ナッサウ-ザールブリュッケン、4 ゴルムス-ブラウンフェルス、
 5 ゴルムス-リッヒ、6 ゴルムス-ホーエンゾルムス、7 ゴルムス-レーデルハイム、
 8 ゴルムス-ラウバッハ、9 イーゼンブルク-ビルシュタイン、10 イーゼンブルク-ビ
 ユーディングン-メーアホルツ/ヴェヒタースバッハ、11 シュトルベルク-ゲーデルン (-オ
 ルテンベク)、12 シュトルベルク-シュトルベルク、13 シュトルベルク-ヴェルニゲロー
 デ、14 ザイン-ヴィットゲンシュタイン-ベルレブルク、15 ザイン-ヴィットゲンシュタ
 イン (-ヴィットゲンシュタイン)、16 ヴィルトグラーフ・ウント・ライングラーフ・ツ
 ー・クルムバッハ (ラインガウを領有していた伯)、17 ヴィルトグラーフ・ウント・ラ
 イングラーフ・ツー・ライングラーフシュタイン、18 ライニンゲン-ハルテンブルク、19
 ライニンゲン-ハイデスハイムとライニンゲン-グンタアースブルム、20 ヴェスターブル
 ク・クリストフ系、21 ヴェスターブルク・ゲオルグ系、22 ロイス (ロイス・フォン・
 プ라우エン)、23 シェーンブルク、24 オルテンブルク、25 クリーヒンゲンである。

61 (シュヴァーベン地方の諸伯) の内訳は、1 ハイリゲンベルク・ウント・ヴェアデ
 ンベルクの伯としてのフェルステンベルク侯、2 ブューヒャウの侯である女子大修道院
 長、3 アルトスハウゼンの騎士団管区長としてのエルザス・ウント・ブルグント騎士団
 管轄区域の騎士団管区長、4 オエッティンゲンの諸侯及び諸伯、5 メントーア (モン
 フォルト) 伯領を領有しているためにオーストリア、6 ヘルフェンシュタイン伯領を領
 有しているためにバイエルンの選帝侯、7 クレツツガウ方伯領とズルツ伯領を領有して
 いるためにシュヴァルツェンベルクの侯、8 ケーニクスエックの諸伯、9 ヴァルトブ
 ルクの宮廷司厨長、10 エーバーシュタイン伯領を領有しているためにバーデン-バーデ
 ン辺境伯、11 ホーエンゲールルトスエックを領有しているためにライエン伯、12 フッ
 ガー諸伯、13 ホーエンエムス伯領を領有しているためにオーストリア、14 領地エグロ
 フスを領有しているためにトラウンの諸伯、15 伯領ボンドルフを領有しているため、ザ
 ンクト・ブラージェンの侯及び大修道院長、16 タンハウゼンを領有しているためシュタ
 ディオンの諸伯、17 領地エグリンゲンを領有しているためトルン・ウント・タクシスの
 侯、18 ケーフェンヒュラーの諸伯 (ペルヅナリスト [雇用人])、19 キューフシュタイ
 ンの諸伯、20 コロレドの侯 (ペルヅナリスト)、21 ハラッハの諸伯、22 シュテルン
 ベルクの諸伯、23 ナイペルクの伯、24 ホーエンツォレルンの諸伯である。

62 (フランケン地方の諸伯) の内訳は、1 ホーエンローエの諸侯と諸伯、2 カステ

ルの諸伯、3 エアバッハの諸伯、4 ヴェルトハイム伯領を領有しているためレーヴェンシュタインの諸侯及び諸伯、5 伯領リンブルクの世襲自由地相続人、6 伯領リーネックを領有しているためノスティッツの諸伯、7 領地ザインスハイム或いは侯爵領になった伯領シュヴァルツェンベルクを領有しているためシュヴァルツェンベルクの侯、8 伯領ヴォルフシュタイン自由地相続人たち、つまりホーエンローエ-キルヒベルクの侯とギーヒの伯、9 領地ライヒェルスベルクを領有しているためシェーンボルンの諸伯、10 領地ヴィーゼントハイドを領有しているためシェーンボルンの諸伯、11 ヴィンディッシュグレッツの諸伯（ペルゾナリスト）、12 ローゼンベルクの（ウアジン）諸伯（ペルゾナリスト）、13 シュタルヘムベルクの諸伯の兄系（ペルゾナリスト）、14 ヴルムブラントの諸伯（ペルゾナリスト）、15 ギーヒの伯（ペルゾナリスト）、16 グレーフェニッツの諸伯（ペルゾナリスト）、17 ピュックラーの諸伯（ペルゾナリスト）である。

63（ヴェストファーレン地方の諸伯）の内訳は、1 ザイン-アルテンキルヒェンを領有しているためアンスパッハの辺境伯、2 ザイン-ハッヒェンブルクを領有しているためキルヒベルクの城伯、3 伯領テクレンブルクを領有しているためプロイセンの王、4 上区伯領ヴィードを領有しているためヴィード-ドルンケル、5 ヴィード-ノイヴィードの侯（この合議体の長）、6 伯領シャウムブルクを領有しているためヘッセン-カッセルの方伯とリッペ-ビュッケブルクの伯、7 ホルシュタイン-ゴットルプ-オルデンブルクの公、8 リッペ流域の諸伯、9 ベントハイムの伯、10 伯領ホーヤを領有しているためイングランドの王、11 伯領ディープホルツを領有しているためイングランドの王、12 伯領シュピーゲルベルクを領有しているためイングランド王、13 ヴィルネブルクを領有しているためレーヴェンシュタインの侯と諸伯、14 リートベルクを領有しているためカウニッツの侯、15 伯領ピールモントを領有しているためヴァルデックの侯、16 伯領グロンスフェルトを領有しているためテーアリングの伯、17 伯領レックハイム或いはレックムを領有しているためアスプレモント伯、18 伯領アンホルトを領有しているためザルムの諸侯、19 領地ヴィンネブルク及びバイルシュタインを領有しているためメッターニヒの諸伯、20 伯領ホルツァッペルを領有しているためアンハルト-ベルンブルク-シャウムブルクの侯、21 伯領ブランケンハイム及びゲロルシュタインを領有しているためシュテルンベルクの諸伯、22 ヴィッテムを領有しているためプレッテンベルクの諸伯、23 領地ゲーメンを領有しているためリンブルク-スチュールムの諸伯、24 領地ギンボルン及びノイシュタットを領有しているためヴァルモーデンの諸伯、25 領地ヴィクラツを領有しているためクアドの伯、26 領地ミレンドクを領有しているためオシュタインの諸伯、27 領地ライヒェンシュタインを領有しているためネッセルローデの諸伯、28 伯領シュライデンを領有しているためマルクの諸伯、29 伯領ケルベンおよびロマーズムを領有しているためシャエスベルクの諸伯、30 領地ディックを領有しているためザルム-ライファーシャイドの諸伯、31 ザッセンブルクを領有しているためツォー・デア・マルクの諸伯、32 ハラームントを領有しているためプラーテンの諸伯、33 ラインエックを領有しているためジンツェンドルフの諸伯である。

都市合議体はライン地方の諸都市（14）とシュヴァーベン地方の諸都市（37）で構成さ

れていた。

ライン地方の都市は、1 ケルン、2 アーヘン、3 リューベック、4 ヴォルムス、5 シュパイアー、6 フランクフルト・アム・マイン、7 ゴスラー、8 ブレーメン、9 ハンブルク、10 ミュールハウゼン、11 ノルトハウゼン、12 ドルトムント、13 フリートベルク、14 ヴェツラーである。

シュヴァーベン地方の都市は、1 レーゲンスブルク、2 アウクスブルク、3 ニュルンベルク、4 ウルム、5 エッスリンゲン、6 ロイトリンゲン、7 ネルトリンゲン、8 ローテンブルク・オブ・デア・タウバー、9 シュヴェービッシュ・ハル、10 ロットヴァイル、11 ユーバーリンゲン、12 ハイルブロン、13 シュヴェービッシュ・グミュント、14 メミンゲン、15 リンダウ、16 デインケルスビュール、17 ビーベラッハ、18 ラーフェンスブルク、19 シュヴァインフルト、20 ケンプテン、21 ヴィンツハイム、22 カウフボイレン、23 ヴァイル・デア・シュタット、24 ヴァンゲン、25 イスニー、26 プフレンドルフ、27 オッフエンブルク、28 ロイトキルヒ、29 ヴィンブフェン、30 ヴァイセンブルク (ノルトガウの)、31 ギーゲン、32 ゲンゲンバッハ、33 ツェル・アム・ハルマースバッハ、34 ブーフホルン、35 アーレン、36 ブーヒャウ、37 ポップフィンゲンである。

(4) 帝国クライス

これら多くの帝国構成員を、地域的に、1500および1512年の帝国改革時につくりだされた6ないし10の帝国クライスにしたがって処理すれば、(ドイツ国民の) 神聖ローマ帝国の終りには、以下の版図が生じた。

①オーストリア帝国クライス

エスターライヒ・オブ・デア・エムス (オーバーエスターライヒ)^{エルツヘルツォークトウム} 大公領とエスターライヒ・ウンター・デア・エンス (ニーダーエスターライヒ)、シュタイアマルク (を含んだインナーエスターライヒ) 公領 (カラントニッシェ・マルク)、ケルンテン公領、クライン公領、オーストリアの一部のフリアウル公領、侯爵化したティロール伯領 (また [フォルダーエスターライヒを含んで] オーバーエスターライヒと呼ばれている)、ブライスガウ方伯領 (を含んだフォルダーエスターライヒ)、シュヴェービッシュ・エスターライヒ、フォアアルベルクの諸領地^{ヘルツェグトーム}、トリエント高司教区本部、ブリクセン高司教区本部、ドイツ騎士団のオーストリア騎士団管轄区域とエッチュ流域騎士団管轄区域、タラスブ荘園、クール [チューア] 高司教区本部である。

②ブルグント帝国クライス

ブラバント公領、リンブルク公領、ルクセンブルク公領、フランドル伯領、ヘネガウ伯領、ナムール伯領、ケルンテン公領の上区である。

③クーアライン帝国クライス

マインツ (クーアマインツ)、トリーア (クーアトリーア)、ケルン (クーアケルン)、プファルツ (クーアプファルツ)、アーレンベルク侯領、トルン・ウント・タクシス、ドイツ騎士団のコブレンツ騎士団管轄区域、バイルシュタイン領地、ニーダーイーゼンベルク伯領、ラインエック城伯領である。

④フランケン帝国クライス

バンベルク高司教区本部、ヴェルツブルク高司教区本部、クルムバッハ侯領（バイロイト）、アイヒシュテット高司教区本部、アンスパッハ侯領、ドイツ騎士団の騎士団長領メルゲントハイム、侯爵領化したヘンネベルク伯領、侯爵領化したシュヴァルツェンベルク伯領、レーヴェンシュタイン-ヴェルツハイム侯領、ホーエンローエ伯領、カステル伯領、ヴェルツハイム伯領、リーネック伯領、エアパッハ伯領、リンブルク領地、ザインスハイム領地、ライヒェルスベルク領地、ヴィーゼントハイト領地、ヴェルツハイム領地、ハウゼン領地、ニュルンベルク帝国都市、ローテンブルク・オブ・デア・タウバー帝国都市、ヴィンツハイム帝国都市、シュヴァインフルト帝国都市、ヴァイセンブルク帝国都市である。

⑤バイエルン帝国クライス

ザルツブルク大高司教区本部、バイエルン大公領ならびにオーバープファルツ大公領、フライジング高司教区本部、ノイブルク（プファルツ-ノイブルク）侯領とズルツバッハ（プファルツ-ズルツバッハ）侯領、レーゲンスブルク高司教区本部、侯爵化したロイヒテンベルク方伯領、パッサウ高司教区本部、侯爵化したシュテルンシュタイン伯領、侯爵化したベルヒテスガーデン司教座聖堂首席司祭管区、レーゲンスブルクにある侯爵化したザンクト・エメラム大修道院領、ハーグ伯領、オルテンブルク伯領、レーゲンスブルクにある侯爵化したニーダーミュンスター大修道院領、エーレンフェルス領地、レーゲンスブルクにある侯爵化したオーバーミュンスター大修道院領、ズルツビュルク領地とピールバウム領地、ホーエンヴァルデック領地、ブライテンエック領地、レーゲンスブルク帝国都市である。

⑥シュヴァーベン帝国クライス

コンスタンツ高司教区本部、アウクスブルク高司教区本部、侯爵の司教座聖堂首席司祭管区エルヴァンゲン、侯爵の大修道院領ケンプトン、公領ヴェルテンベルク・ウント・テック、バーデン（バーデン-バーデン）上部辺境伯領、バーデン（バーデン-ドゥアラッハ）下部辺境伯領、ハッハベルク辺境伯領、侯爵化したホーエンツォルレルン-ヘヒンゲン伯領、ホーエンツォルレルン-ジグマリンゲン伯領、侯爵化したリンダウ女子修道院領、侯爵化したブーヒャウ女子修道院領、侯爵化したテンゲン伯領、ハイリゲンベルク伯領、エッティンゲン伯領、クレットガウにある侯爵化した方伯領、リヒテンシュタイン侯領、ザルマンスヴァイラー（ザーレム）大修道院領、ヴァインガルテン大修道院領、オクセンハウゼン大修道院領、エルヒンゲン大修道院領、イルゼー大修道院領、ウーアスベルク大修道院領、カイスハイム（カイザースハイム）大修道院領、ロッゲンブルク大修道院領、ロート大修道院領、ヴァイセナウ大修道院領、シュッセンリート大修道院領、マルヒタール大修道院領、ペーターズハウゼン大修道院領、ヴェッテンハウゼン司教座教会首席司祭管区、ツヴィーファルテン大修道院領、ゲンゲンバッハ大修道院領、ヘッグバッハ大修道院領、グーテンツェル大修道院領、ロッテンミュンスター大修道院領、バイント大修道院領、ドイツ騎士団のマイナウ騎士修道会管区（騎士団管轄区域エルザス＝ブルグントの一部 [エルザス・ウント・ブルグント]）、シュトゥリンゲン方伯領、バール方伯領、ヴィーゼンシュタイク領地、ハウゼン領地、メスキルヒ領地、テットナング領地とアルゲン領地、オ

エッティンゲン-ヴァレルシュタイン侯家の所領、ヴァルトブルク-ツァイル-ツァイルとヴァルトブルク-ツァイル-ヴルツァハの世襲司厨長の所領、ヴァルトブルク-ヴォルフエッグ-ヴォルフエッグとヴァルトブルク-ヴォルフエッグ-ヴァルトゼーの世襲司厨長の所領、ヴァルトブルク-シェール-シェールとヴァルトブルク-トラオッホブルク（ヴァルトブルク-ツァイル-トラオッホブルク）の世襲司厨長の所領、ローテンフェルス伯領とシュタウフェン領地、ケーニックスエック伯領とアウレンドルフ領地、ミンデルハイム領地とシュヴァーペエック、グルンデルフィンゲン領地、エーバーシュタイン伯領、フッガー諸伯の所領、ホーエンエムス伯領、ユスティンゲン領地、ボンドルフ伯領、エグロフス領地、タンハウゼン領地、ホーエンゲーロルトスエック伯領、エグリンゲン領地、アウクスブルク帝国都市、ウルム帝国都市、エッスリンゲン帝国都市、ロイトリンゲン帝国都市、ネルトリンゲン帝国都市、シュヴェービッシュ・ハル帝国都市、ユーバーリンゲン帝国都市、ロットヴァイル帝国都市、ハイルブロン帝国都市、シュヴェービッシュ・グミュント帝国都市、メミンゲン帝国都市、リンダウ帝国都市、ディンケルスビュール帝国都市、ビーベラッハ帝国都市、ラーフェンスブルク帝国都市、ケンプテン帝国都市、カウフボイレン帝国都市、ヴァイル・デア・シュタット帝国都市、ヴァンゲン帝国都市、イスニー帝国都市、ロイトキルヒ帝国都市、ヴィンプフェン帝国都市、ギーンゲン帝国都市、プフレンドルフ帝国都市、ブーフホルン帝国都市、アーレン帝国都市、ボプフィンゲン帝国都市、ブーヒャウ帝国都市、オッフエンブルク帝国都市、ゲンゲンバッハ帝国都市、ツェル・アム・ハルメルスバッハ帝国都市である。

⑦オーバーライン帝国クライス

ヴォルムス高司教区本部、シュパイアー高司教区本部、侯爵化されたヴァイゼンブルク司教座教会首席司祭管区、シュトラースブルク高司教区本部、バーゼル高司教区本部、フルダ高司教区本部、ハイタースハイム（ヨハネ騎士団）侯領、侯爵化したプリューム大修道院領、オーデンハイム帝国司教座聖堂首席司祭管区（オーデンハイム・ウント・ブルッフザール）、ジメルン（プファルツ-ジメルン）侯領、ラウテルン（プファルツ- [カイザーズ-] ラウテルン）侯領、プエルデンツ（プファルツ-プエルデンツ）侯領、ツヴァイブリュッケン（プファルツ-ツヴァイブリュッケン）侯領、ヘッセン-カッセル方伯領、ヘッセン-ダルムシュタット方伯領、ヘアスフェルト侯領、シュボンハイム伯領、ノメニー辺境伯領、侯爵化されたザルム伯領、ナッサウ-ヴァイルブルク侯の所領、ナッサウ-ザールブリュッケン-ウージンゲン侯の所領、ナッサウ-ザールブリュッケン-ザールブリュッケン侯の所領、ヴァルデック伯領、ハーナウ-ミュンツェンベルク伯領、ハーナウ-リヒテンベルク領地、ゾルムス-ブラウフェルス侯家一門の所領、ゾルムス-リッヒ-ホーエンゾルムス伯一門の所領、ゾルムス-ラウバッハ伯一門の所領、ゾルムス-レーデルハイム伯一門の所領、ケーニヒシュタイン（一部はクーアマイントの、一部はシュトルベルクの）伯領、オーバーリーゼンブルク伯領、侯家一門に分化したイーゼンブルク-ビルシュタイン、伯家一門に分化したイーゼンブルク-ビューディゲン-ビューディゲン、伯家一門に分化したイーゼンブルク-ビューディゲン-ヴェヒターバッハ、伯家一門に分化したイーゼンブルク-ビューディゲン-メーアホルツ、ヴィルト・ウント・ライングラーフ（ヴィルトグラ-

フ・ウント・ライングラーフ)の所領、分化した侯爵系ザルム-キールブルク、ライン伯系グルムバッハ(ザルム-グルムバッハ)、ライン伯系シュタイン(ザルム-シュタイン)、ライニゲン-ハルテンブルクの諸伯の所領、帝国直属のメンスフェルデン(ミュンツフェルデン)の城と村、ザイン-ヴィットゲンシュタイン-ヴィットゲンシュタイン伯領、ザイン-ヴィットゲンシュタイン-ベルレブルク伯領、ファルケンシュタイン伯領、ライポルトスキルヒェン領地、クリーヒンゲン伯領、ヴァルテンベルク伯領、プレツェンハイム領地、ダグシュトゥル領地、オルブリュック(オールブリュック)領地、ヴォルムス帝国都市、シュパイアー帝国都市、フランクフルト・アム・マイン帝国都市、フリードベルク帝国都市、ヴェツラー帝国都市である。

⑧ニーダーライン-ヴェストファーレン帝国クライス

ミュンスター高司教区本部、クレーベ公領ならびにマルク伯領とラーフェンスベルク伯領(1614年にブランデンブルクに)、ユーリッヒ公領とベルク大公領(1614年にプファルツ-ノイブルクに)、パーダーボルン高司教区本部、リュッティヒ高司教区本部、オスナブリュック高司教区本部、ミンデン侯領、フェアデン侯領、侯爵化されたコルバイ大修道院領、侯爵化されたシュタプロ大修道院領とマルメディー大修道院領、ヴェアデン大修道院領、コルネリミュンスター大修道院領、侯爵化されたエッセン大修道院領、トゥルン女子修道院、フェルホルト女子修道院、ナッサウ-ディーツ諸侯の所領、オストフリースラント侯領、モエルス侯領、ヴィート伯領、ザイン伯領、シャウムブルク(一部はヘッセン-カッセル、一部はリッペに所属)伯領、オルデンブルク伯領とデルメンホルスト伯領、リッペ伯領、ベントハイム伯領、シュタインフルト伯領、テクレンブルク伯領とリンゲン伯領、ホーヤ伯領、ヴィルネブルク伯領、ディープホルツ伯領、シュピーゲルベルク伯領、リートベルク伯領、ピールモント伯領、グロンスフェルト伯領、レックハイム伯領、アンホルト領地、ヴィンネブルク領地とバイルシュタイン領地、ホルツァッペル伯領、ヴィッテム領地、ブランケンハイム伯領とゲロルシュタイン伯領、ゲーメン領地、ギムボルン領地とノイシュタット領地、ヴィクラツ領地、ミレンドンク領地、ライヒェンシュタイン領地、ケルペン・ウント・ロマーズム(ケルペン-ロマーズム)伯領、シュライデン伯領、ハラームント伯領、ケルン帝国都市、アーヘン帝国都市、ドルトムント帝国都市である。

⑨オーバーザクセン帝国クライス

ザクセン(クーアザクセンの所領)、マルク-ブランデンブルク、エルネスティー系のザクセン諸大公の所領、つまりザクセン-ヴァイマル侯領、ザクセン-アイゼナハ侯領、ザクセン-コーブルク侯領、ザクセン-ゴータ侯領、ザクセン-アルテンブルク侯領、ハッツフェルト諸侯の所領、クヴェーアフルト侯領、スウェーデン持ち分のポメルン公領、プロイセン持ち分のポメルン公領、カミン侯領、アンハルト侯領、クヴェドリンプルク大修道院領、ゲルンローデ大修道院領、ヴァルケンリート修道院領、シュヴァルツブルク-ズンダースハウゼン侯領、シュヴァルツブルク-ルーデルシュタット侯領、マンズフェルト侯領、伯領シュトルベルクとヴェルニゲローデ、バルビー伯領、ロイス諸伯の諸領地、シェンブルク諸伯の諸領地、ホーンシュタイン伯領ならびにローラ領地とクレッテンベルク領地である。

⑩ニーダーザクセン帝国クライス

マクデブルク公領、ブレーメン公領、リユーネブルク（ツェレ）侯領、グルーベンハーゲン（ブラウンシュヴァイク-グルーベンハーゲン）侯領、カーレンベルク（ブラウンシュヴァイク-カーレンベルク）侯領、ヴォルフエンビュッテル（ブラウンシュヴァイク-ヴォルフエンビュッテル）侯領、ハルバーシュタット侯領、メクレンブルク-シュヴェリーン公領、メクレンブルク-ギュストロー公領、ホルシュタイン-グリュックシュタット公領、ホルシュタイン-ゴットルプ公領、ヒルデスハイム高司教区本部、ザクセン-ラウエンブルク公領、リユーベック高司教区本部、シュヴェリーン侯領、ラッツェブルク侯領、ブランケンブルク侯領、ランツァウ伯領、リユーベック帝国都市、ゴスラー帝国都市、ミュールハウゼン帝国都市、ノルトハウゼン帝国都市、ハンブルク帝国都市、ブレーメン帝国都市である。

これら6ないし10個の帝国クライスに含まれていないのが、ベーメン王国、メーレン辺境伯領、アシュ領地、ブルトシャイト帝国高司教区本部、カッペンベルク司教座聖堂首席司祭管区、ドライス領地、ディック領地、エルテン女子修道院、フロイデンベルク（フロイデンブルク）領地、ヘルストゲン・ヘルリヒカイト（領地）ならびに騎士所在地フローネンブルク（フローネンブルッフ）、ハーデルン地方、ホンブルク伯領、イエーファー領地、オーバーラウジッツ辺境伯領、ニーダーラウジッツ辺境伯領、クニップハウゼン領地、ランツクローン帝国領地、レーバッハ領地、メヒエルニヒ帝国領地、メンベルガルト伯領、ナルバッハ領地、オーバーシュタイン領地、ピールモント領地、ラーデ（ラーツ）領地、レーダ領地、リヒョルト領地、ザッフェンブルク領地、プロイセンとベーメンの一部であるシュレージエン公領、グラッツ伯領、シャウエン帝国領地、シャウムブルク領地、シェーナウ領地、シェンタール（シェンタール）大修道院領、シュヴァルツェンホルツ領地、シュタイン領地、ヴァッサールブルク領地、ヴィルデンベルク（ヴィルデンブルク）領地、ヴィンデン主任司祭管区、ヴィルレ領地、ファグノレ伯領（同様にその帝国騎士と帝国直属村落）である。

(5) ドイツ帝国代表者会議主要決議による変化

1648年以後の数多くの戦争による対決が著しい変化をもたらした（例えば、フランスへの〔1681年シュトラースブルク〕の損失、南部ネーデルラントと北イタリアの一部がスペインからオーストリアへ移行、南東部におけるオーストリアの勝利、ブランデンブルクのためにクレーヴェ-マルク-ラーフェンスベルクの獲得、ブランデンブルクによるプロイセンにおける統治権と王冠の獲得、プロイセンによるシュレージエン征服、ロシア・オーストリア・プロイセンの支配下でのポーランド分割、ヴィッテルスバッハ家の土地の統合、ハノーファーのイングランドとの結合、ザクセンのポーランドとの結合）後、1803年2月25日のドイツ帝国代表者会議主要決議（32条）は、即刻、帝国の国制に劇的な変化をもたらした。決議はライン左岸の領土をフランスに補償してもらうことを前提に、なお現存した合計47帝国都市の内の41都市と、ほとんど全ての聖界領（3選帝侯領、19帝国司教区、44帝国大修道院領）の解体を決めた。解体されたそれらの地は、改革以前は少なくともドイツ語を話すドイツ帝国領土の六分の一から七分の一を占め、その内の80弱が帝国議会へ参

加していた。しかしそれとは対照的に、この過程を通じて生き残った帝国議会の構成員は「補償」を名目に領土を拡大した。従来通り帝国議会の構成員としてバーデンはライン左岸で接収された8平方マイルの代替として右岸に59平方マイルの補償を、バイエルンは255平方マイルの損失に対して290平方マイル、プロイセンは48平方マイル損失に対して235平方マイル、ヴェルテンベルクは7平方マイルを失って29平方マイルを得ている（1平方マイルは56平方キロメートル）。それ以外になお以下に述べる新しい単独票〔単独投票権〕が付け加わった。

皇帝はオーストリア公として、シュタイアーマルクの代表として1票、クラインの代表として1票、ケルンテンの代表として1票、ティロールの代表として1票（合計4票）を得た。プファルツ選帝侯はバイエルン大公として、ベルク公領の代表として1票、ズルツバッハ（プファルツ-ズルツバッハ）の代表として1票、ニーダーバイエルンの代表として1票、ミンデルハイムの代表として1票（合計4票）を得た。プロイセン王はマクデブルク公として、エアフルトの代表として1票、アイヒスフェルトの代表として1票（合計2票）を得た。（マインツの）選帝侯・帝国尚書長官は、アシャッフエンブルク侯領の代表として1票、ザクセン選帝侯は、マイセン辺境伯として1票、マイセン城伯領の代表として1票、クヴェーアフルトの代表として1票（合計3票）、ザクセン選帝侯は、ザクセン-ヴァイマルの諸公やザクセン-ゴータの諸公と交代で、テューリンゲンの代表として1票、イングランド王はブレーメン公としてゲッティンゲン（ブラウンシュヴァイク-ゲッティンゲン）の代表として1票、ブラウンシュヴァイク-ヴォルフエンビュッテル公はブランケンブルクの代表として1票、バーデン辺境伯は、シュパイアーの代わりにブルッフザールの代表として1票、シュトラースブルクの代わりにエッテンハイムの代表として1票（合計2票）、ヴェルテンベルク公は、テックの代表として1票、ツビーアールテンの代表として1票、テュービンゲンの代表として1票（合計3票）、デンマーク王はホルシュタイン公としてプレーンの代表として1票、ヘッセン-ダルムシュタット方伯はヴェストファーレン公領の代表として1票、シュタルケンブルクの代表として1票（合計2票）を得た。ヘッセン-カッセル方伯はフリッツラーの代表として1票、ハーナウの代表として1票（合計2票）、モデナ公はブライスガウの代表として1票、オルテナウの代表として1票（合計2票）、メクレンブルク-シュトレリッツ公はシュタルガルトの代表として1票、アーレンベルク公は残ったライン右岸の所領への補償としての単独票（1票）を得た。ザルム-ザルム侯はそれまではザルム-キールブルクと共同でもっていた投票権（1票）を単独票として1票、ナッサウ-ウージンゲン侯は1票、ナッサウ-ヴァイルブルク侯は1票、ホーエンツォレルン-ジグマリンゲン侯は1票、ザルム-キールブルク侯は1票、フルステンベルク侯はバルとシュテューリンゲンの代表として1票、シュヴァルツェンベルク侯はクレットガウの代表として1票、トルン・ウント・タクシスの侯はブーヒャウの代表として1票を得た。ヴァルデック侯は1票、レーヴェンシュタイン-ヴェルトハイム侯は1票、オエッティンゲン-シュピールベルク侯は1票、オエッティンゲン-ヴァレルシュタイン侯は1票、ゾルムス-ブラウンフェルス侯は1票、ホーエンローエ-ノイエンシュタイン諸侯は1票、ホーエンローエ-ヴァルデンプルク-シリングスフルスト侯は1

票、ホーエンローエ-ヴァルデンブルク-パルテンシュタイン侯は1票、イーゼンブルク-ビルシュタイン侯は1票、カウニッツ侯はリートベルクの代表として1票、ロイス-ブラウエン-グライツ侯は1票、ライニゲン侯は1票、リグネ侯はエーデルシュテッテンの代表として1票、ローツ公はヴォルベックの代表として1票を得た。

以上のことから、ドイツ帝国代表者会議主要決議32条によって定められた、以下の帝国諸侯会議の招集が生じた。つまり 1 オーストリア、2 オーバーバイエルン、3 シュタイアーマルク (オーストリア)、4 マクデブルク (プロイセン) 5 ザルツブルク、6 ニーダーバイエルン、7 レーゲンスブルク、8 ズルツバッハ (プファルツ-ズルツバッハ)、9 ドイツ騎士団、10 ノイブルク (プファルツ-ノイブルク)、11 バンベルク、12 プレーメン、13 マイセン辺境伯、14 ベルク (バイエルン、プファルツ) 15 ヴュルツブルク、16 ケルンテン (オーストリア)、17 アイヒシュテット、18 ザクセン-コーブルク、19 ブルッフザール (バーデン)、20 ザクセン-ゴータ、21 エッテンハイム (バーデン)、22 ザクセン-アルテンブルク、23 コンスタンツ、24 ザクセン-ヴァイマル、25 アウクスブルク、26 ザクセン-アイゼナハ、27 ヒルデスハイム、28 ブランデンブルク-アンスバッハ、29 パーダーボルン、30 ブランデンブルク-バイロイト、31 フライジング、32 ブラウンシュヴァイク-ヴォルフエンビュッテル、33 テューリンゲン (ザクセンないしザクセン-ヴァイマル、ザクセン-ゴータ)、34 ブラウンシュヴァイク-ツェレ、35 ナッサウ、36 ブラウンシュヴァイク-カーレンベルク、37 トリエント、38 ブラウンシュヴァイク-グルーベンハーゲン、39 ブリクセン、40 ハルバーシュタット、41 クライン (オーストリア)、42 バーデン-バーデン、43 ヴュルテンベルク、44 バーデン-ドゥアラッハ、45 オスナブリュック、46 フェアデン、47 ミュンスター、48 バーデン-ハッハベルク、49 リューベック、50 ヴュルテンベルク (テック)、51 ハーナウ (ヘッセン-カッセル)、52 ホルシュタイン-グリュックシュタット、53 フルダ、54 ホルシュタイン-オルデンブルク、55 ケンプテン、56 メクレンブルク-シュヴェリーン、57 エルヴァンゲン、58 メクレンブルク-ギュストロー、59 マルテゼルオルデン、60 ヘッセン-ダルムシュタット、61 ベルヒテスガーデン、62 ヘッセン-カッセル、63 ヴェストファーレン (ヘッセン-ダルムシュタット)、64 フォアポメルン、65 ホルシュタイン-プレーン (デンマーク)、66 ヒンターポメルン、67 ブライスガウ (モデナ)、68 ザクセン-ラウエンベルク、69 コルバイ、70 ミンデン、71 マイセン城伯 (ザクセン)、72 ロイヒテンベルク、73 アンハルト、74 ヘンネベルク、75 シュヴェリーン、76 カミン、77 ラーツェブルク、78 ヒルシュフェルト (ヘアスフェルト)、79 ティロール (オーストリア)、80 テュービンゲン (ヴュルテンベルク)、81 クヴェーアフルト (ザクセン)、82 アーレンベルク、83 ホーエンツォレルン-ヘビュンゲン、84 フリッツラー (ヘッセン-カッセル)、85 ロブコヴィッツ、86 ザルム-ザルム、87 ディートリヒシュタイン、88 ナッサウ-ハダマル、89 ツヴィーファルテン (ヴュルテンベルク)、90 ナッサウ-ディレンブルク、91 アウエルシュペルク、92 シュタルケンブルク (ヘッセン-ダルムシュタット)、93 オストフリースラント、94 フェルステンベルク、95 シュヴァルツェンベルク、96 ゲッティンゲン (ブラウンシュヴァ

イク-ゲッティンゲン)、97 ミンデルハイム (バイエルン)、98 リヒテンシュタイン、99 トルン・ウント・タクシス、100 シュヴァルツブルク、101 オルテナウ (モデナ)、102 アシャッフエンブルク (マインツ) (ないし選帝侯の位である尚書長官)、103 アイヒスフェルト (プロイセン)、104 ブラウンシュヴァイク-ブランケンブルク (ブラウンシュヴァイク-ヴォルフエンビュッテル)、105 シュタルガルト (メクレンブルク-シュトレーリッツ)、106 エアフルト (プロイセン)、107 ナッサウ-ウージゲン、108 ナッサウ-ヴァイルブルク、109 ホーエンツォレルン-ジグマリンゲン、110 ザルム-キールブルク、111 フュルステンベルク-バル、112 シュヴァルツェンベルク-クレットガウ、113 タクシス-ブーヒャウ (トルン・ウント・タクシス)、114 ヴァルデック、115 レーヴェンシュタイン-ヴェルトハイム、116 オエッティンゲン-シュピールベルク、117 オエッティンゲン-ヴァレルシュタイン、118 ゴルムス-ブラウンフェルス、119 ホーエンローエ-ノイエンシュタイン、120 ホーエンローエ-ヴァルデンブルク-シリングスフルスト、121 ホーエンローエ-ヴァルデンブルク-バルテンシュタイン、122 イーゼンブルク-ビルシュタイン、123 カウニッツ-リートベルク、124 ロイス-ブラウエン-グライツ、125 ライニンゲン、126 リグネ (エーデルシュテッテン)、127 ローツ (ヴォルベック)、128 シュヴァーベン諸伯、129 ヴェッテラウ諸伯、130 フランケン諸伯、131 ヴェストファーレン諸伯である

帝国諸侯会議で名簿に登録されている帝国諸侯の内、以下に述べる帝国諸侯は、既に1582年のアウクスブルク帝国議会において登録済みで、その慣例に従って重要だった。そのアウクスブルク帝国諸侯会議では、それまで諸侯各人に与えられていた単独票 (聖界単独票が46で世俗単独票が53、1792年に比べて、38の聖界単独票に対して64の世俗単独票、そして最終的に33の聖界単独票に対して61世俗単独票) を、当時現存していた支配圏つまり統治権の及ぶ範囲に拘束した。

1582年のアウクスブルク帝国議会で既に登録済みの帝国諸侯とは以下の諸侯である。オーストリア、バイエルン、プファルツ-ラウテルン、プファルツ-ジメルン、プファルツ-ノイブルク、プファルツ-ツヴァイブリュッケン、プファルツ-フェルデンツ、ザクセン-ヴァイマル、ザクセン-アイゼナハ、ザクセン-コーブルク、ザクセン-ゴータ、ザクセン-アルテンブルク、ブランデンブルク-アンスバッハ、ブランデンブルク-クルムバッハ、ブラウンシュヴァイク-ツェレないしリューネブルク、ブラウンシュヴァイク-カーレンベルク、ブラウンシュヴァイク-グルーベンハーゲン、ブラウンシュヴァイク-ヴォルフエンビュッテル、メクレンブルク-シュヴェリーン、メクレンブルク-ギュストロー、ヴェルテンベルク、ヘッセン-カッセル、ヘッセン-ダルムシュタット、バーデン-バーデン、バーデン-ドゥアラッハ、バーデン-ハッハベルク、ホルシュタイン-グリュックシュタット、サヴォイア、ロイヒテンベルク、アンハルト、ヘンネベルク、ノメニー、昔からの侯の家系 (14の昔から侯である独立領主、1776年に9家だった) としてメンベルガルトとアーレンベルクの諸侯である。それに対して、1582年以後帝国諸侯に上昇した新諸侯一門 (14、1767年に13) にホーエンツォレルン、エッゲンベルク (1717年滅亡)、ロブコヴィッツ、ザルム、デイトリヒシュタイン、ピッコロミーニ (1757年まで)、ナッサウ-ハダマル (1771年まで)、

ナッサウ-ディレンブルク、ナッサウ-ジューゲン（1743年まで）、アウアーシュベルク、ポルティア（1776年まで）、オストフリースラント、フェルステンベルク、シュヴァルツェンベルク、ヴァルデック、ミンデルハイム（一時的に、マルボロ公の代理として）、リヒテンシュタイン、トルン・ウント・タクシスとシュヴァルツブルク、さらに帝国諸伯出自の、単独票を付与されていない一門コロレド、ホーエンローエ、イーゼンブルク、ライニンゲン、オエッティンゲン、ローゼンベルク、ザイン、シェーンブルク、ゾルムス、シュトルベルク、ヴァルトブルクとヴィート、同様に1803年以後そこに上昇してきた一門メッターニヒ、トラウトマンズドルフとヴィンディッシュグレッツが入る。

4 ドイツ連邦

1804年に神聖ローマ帝国のハプスブルク家の皇帝（フランツ 2世）は、ナポレオンの範例に従って、自分の世襲地（オーストリア）向けに、二つめの皇帝称号（フランツ 1世）を採用していたが、ナポレオンの政治的圧力と、ナポレオンと結びついたライン同盟の諸侯の圧力で、1806年8月6日に神聖ローマ帝国の皇帝を退位した。その結果、まだ存続していた帝国構成員は、まもなく独立した国（シュタート）になったのは明確である。それらの国はナポレオンの残り7年間の権力行使で思い通りにされたのだが。ナポレオンの支配から解放された後（1813年）、自由主義の理想家から要求されたドイツ民族国家をとらず、諸侯と、ドイツでないヨーロッパに支持され、ナポレオン以前の領土状態に基づいて、個々の侯の主権を保持したドイツ連邦を選んだ。

このドイツ連邦は1815年に国家連合として生まれ、1866年まで継続した。この国家連合は1815年に面積約1万1495平方マイルを包括し、人口約3200万人で、そこには以下の国が所属していた。オーストリア帝国（3480平方マイル、人口976万5500人）、プロイセン王国（3307平方マイル、人口873万人）、バイエルン王国（1499平方マイル、363万800人）、ザクセン王国（278平方マイル、人口138万6900人）、ハノーファー王国（695平方マイル、人口146万3700人）（イングランドないしはイギリス連合王国との同君連合において1837年まで）、ヴェルテンベルク王国、バーデン大公国、ヘッセン（ヘッセン-カッセル）選帝侯国、ヘッセン（ヘッセン-ダルムシュタット）大公国、ホルシュタイン（トラウエンブルク）公国（デンマーク国王）、ルクセンブルク大公国（オランダ）、ブラウンシュヴァイク公国、メクレンブルク-シュヴェーリーン大公国、ナッサウ公国、ザクセン-ヴァイマール（-アイゼナハ）大公国、ザクセン-ゴータ公国（1825年消滅）、ザクセン-コーブルク公国（1826年からザクセン-コーブルク-ゴータ）、ザクセン-マイニンゲン公国、ザクセン-ヒルトブルクハウゼン公国（1826年まで）、ザクセン-アルテンブルク公国（1826年から）、メクレンブルク-シュトラーリッツ大公国、（ホルシュタイン-）オルデンブルク大公国、アンハルト-デッサウ公国（1863年からアンハルト）、アンハルト-ベルンブルク公国（1863年消滅）、アンハルト-ケーテン公国（1847年消滅）、シュヴァルツブルク-ズンデルスハウゼン侯国、シュヴァルツブルク-ルーデルシュタット侯国、ホーエンツォレルン-ヘヒンゲン侯国、ホーエンツォレルン-ジグマリンゲン侯国（1849年プロイセンにわたる）、リヒテンシュタイン侯国（2.45平方マイル、人口5800人）、ヴァルデック侯国、ロイス兄弟侯国、ロイス弟系

侯国、シャウムブルク-リッペ侯国（9・75平方マイル、人口2万5500人）、リッペ（-デトモルト）侯国、リューベック自由都市、フランクフルト自由都市、ブレーメン自由都市、ハンブルク自由都市、リンブルク（1839年から、オランダ）、ヘッセン-ホンブルク（地方伯領、7・84平方マイル、人口2万400人、1817年から加盟、1866年に消滅）である。

それ以外にロシアはワルシャワ公領の大部分を、同君連合において、王国（立憲君主制ポーランド）として獲得した。プロイセンはザクセンの北半分、ライン地方、ヴェストファーレン、残ったスウェーデン領のフォアポメルン、ダンツィヒ、トルン、そしてポーゼンを獲得した。オーストリアは再びフォアアルルベルク、ティロール、ザルツブルク（インフィアテルとハウスルックフィアテル1816年）、ケルンテン、クライン、イストリン、タルノポール・クライス、ロンバルド-ヴェネチエン、トスカナ・ウント・モデナ（ブライスガウと南部オランダを失った時）を、スイスはヴァリス、ノイエンプルク、ゲンフなどのカントンと永世中立の保証を獲得した。

5 北ドイツ連邦

プロテスタント化を押し進めたプロイセンと、カトリックのハープスブルク家の多民族国家オーストリア-ハンガリーとの政治的な対立で、1866年8月24日にドイツ連邦が崩壊した時、非ドイツ人の巨大勢力は、既に1848年にプロイセンの指揮下で目論まれていた小ドイツ民族国家の形成を阻止した。しかし、プロイセンは、1866年8月に面積41万5000平方キロメートルで人口3000万人の北ドイツ連邦を形成することに成功した。北ドイツ連邦（1866年8月から1870年12月まで存続）は22のラント（邦国）から構成され、その内訳はプロイセン、ザクセン、ヘッセン（-ダルムシュタット、マイン川の北部）、メクレンブルク-シュヴェーリン、メクレンブルク-シュトレーリッツ、オルデンブルク、ブラウンシュヴァイク、ザクセン-ヴァイマル、ザクセン-マイニンゲン、ザクセン-アルテンブルク、ザクセン-コーブルク-ゴータ、アンハルト、シュヴァルツブルク-ルードルシュタット、シュヴァルツブルク-ゾンデルスハウゼン、ヴァルデック、ロイス兄系、ロイス弟系、シャウムブルク-リッペ、リッペ、ハンブルク、ブレーメン、リューベックである。北ドイツ連邦憲法は1867年7月1日に制定され、プロイセンの優位によって特徴付けられていた。

6 第二帝国と第三帝国

(1) 第二ドイツ帝国

スペインの王位継承を巡るフランスとの争い（1870-71年）で圧倒的に勝利したことは、かろうじて残っていた南部ドイツの諸邦が帝政に加盟するのと、北ドイツ連邦が帝国に変化するのを促進したのは言うまでもない。プロイセンが統治したこの第二ドイツ帝国は、面積54万742平方キロメートルで人口5637万人を包括していた。それは、かろうじて、プロイセン王国、バイエルン王国、ザクセン王国、ヴェルテンベルク王国、バーデン大公国、ヘッセン-ダルムシュタット大公国、メクレンブルク-シュヴェーリン大公国、メクレンブルク-シュトレーリッツ大公国、ザクセン-ヴァイマル大公国、オルデンブルク大公国、

ブラウンシュヴァイク公国、ザクセン-マイニンゲン公国、ザクセン-アルテンブルク公国、ザクセン-コーブルク-ゴータ公国、アンハルト公国、シュヴァルツヴァルト-ゾンダースハウゼン侯国、シュヴァルツブルク-ルードルシュタット侯国、ヴァルデック侯国、ロイス（兄系）侯国、ロイス（弟系）侯国、シャウムブルク-リッベ侯国、リッベ侯国、ブレーメン自由都市、ハンブルク自由都市、リューベック自由都市、そしてエルザス-ロートリンゲンドイツ帝国領から構成されていた。

1918年11月10日、この帝国は連邦制の共和制（ヴァイマル共和国）になった。諸ラントにおいても君主たちは廃位した。領土的な配分は国境での莫大な損失（エルザス-ロートリンゲン、オイペン-マルメディー、北シュレースヴィヒ、西プロイセン、ポーゼン、ゾルダウ・クライス、オーバーシュレージエン、ダンツィヒ、メーメルラント、ザール地方〔オーストリアの当時ドイツ語を話していた地域だけ、イタリアへの南ティロールの損失〕)にもかかわらず、領土的には特別な変化はなかった。

(2) 第三ドイツ帝国

やがて混乱の中で、ヒトラーによる権力掌握によって、第三のドイツ帝国がつけられた。1933から1945年のヒトラーの独裁制も、現存した国境を力で変えようとした対外政策（オーストリアとズデーテン地方への接続、メーメルラント、帝国の保護領としてベーメン-メーレン〔ボヘミア-モラヴィア〕占領、ドイツ側のポーランド占領地域の西半分をダンツィヒ-西プロイセン、ヴァルテラントという二つの国家大管区の設定、東オーバーシュレージエン、オイペン-マルメディー、ルクセンブルク、エルザス-ロートリンゲン、スロヴェニアの部分の占領など）も領土的構成を揺さぶることはなかった。特にヒトラーの独裁政治はこれまでの連邦制を実質的に空洞化させ、そして42のガウを諸ラントと同列に位置づけた。決定は、主として中央でされた。

7 ドイツ連邦共和国、ドイツ民主共和国、オーストリア、スイスそしてリヒテンシュタイン：ヨーロッパへの道

(1) 降伏と占領地区

第二次大戦後ドイツはソ連・アメリカ・イギリスの連合軍による1945年2月のヤルタ会談に基づいて、連合巨大勢力の四占領地区に分割された。オーストリアについては既に1943年1月1日に連合国外相会議で早くもその目標設定に役立つ復元が決議されていたのでオーストリアはドイツ帝国から切離され、四占領地区に分割された。占領地区のために、1945年5月1日の暫定的な国家統治の暫定憲法は、1920年に制定された連邦憲法を再発効することにし、その1929年版を用いた。チェコスロヴァキアも復興された。

ドイツでは、1945年6月5日に、連合軍最高司令官たちは、ドイツにおける最高統治権を獲得したこととそれを行使することについて宣言した（「ベルリン宣言」）。そして連合軍管理理事会を設立し、1945年7月30日に第一回理事会を開催した。1945年8月2日の連合軍戦勝国のポツダム会談でドイツの占領方針が決定された。それによって、平和が回復するまで、四占領地区、ソ連及びポーランドの管理下での2地区（1937年に比べ、事実上の、ドイツ支配領地の24パーセント減少）、ならびにソ連占領地区内で四分割された特別

状態を免れないベルリンに分けられた。

既に1945年7月9日にはソ連が占領した東部では、ドイツ内のソ連軍管理局の指令により、5つの州^{ラント}（ブランデンブルク、メクレンブルク-フォアポメルン、ザクセン、ザクセン-アンハルト、テューリンゲン）がつくられた。それに続いて1945年9月19日アメリカ占領地区ではバイエルン、グロースヘッセン、ヴェルテンベルク-バーデンの3州が（新たに）設置された。

1946年4月21日にソ連占領地区では社会民主党（SPD）と共産党（KPD）が合併して、ドイツ社会主義統一党（SED）が形成された。1946年夏にイギリス占領地区にニーダーライン-ヴェストファーレン州とニーダーザクセン州とシュレースヴィヒ-ホルシュタイン州が、フランス占領地区ではバーデン州、ヴェルテンベルク-ホーエンツォレルン州、ラインラント-プファルツ州が生まれた。

フランスとソ連は、自分たちの占領地区を利益の対象として見ていた。それとは対照的に、アメリカ合衆国には、民主主義の再興のほうが重要であった。それゆえ1947年1月1日、アメリカ占領地区とイギリス占領地区は、経済的に統合された占領地（米・英経済統合地区）として統合された。（両大戦について連帯責任があると見なされた）プロイセンは、1957年の法律によって解体された。

(2) 再建

1948年3月20日、ソ連は連合国管理理事会における協力を中止した。続いてソ連は、ベルリンへの通行路を封鎖しようとした。そのため西側は最強の共同作戦をとり、1949年4月8日に米・英経済統合地区はフランスを入れた3カ国経済統合地区に拡大された。

西側3カ国は、1948年3月6日のロンドンでの6カ国会議に基づいて、西ドイツのために占領条例をつくった。また1949年5月25日には新生ドイツ連邦共和国の基本法を公布した。それに対して、ソ連は憲法を制定し、占領地区において1949年10月7日にドイツ民主共和国（10万8178平方キロメートル、人口1700万人）を設立した。ドイツ民主共和国では、1952から1958年にかけて、州は県^{ベツィルク}に変更され、それにより州制度は廃止された（県制度導入）。オーストリアは、1955年5月15日に中立の義務を負って、国家間の国際条約により、主権を有する、独立した、民主主義の、国家として、1938年1月1日の[オーストリア連邦国]範囲（面積）内で承認された。

(3) ヨーロッパへの道

ドイツ連邦共和国は、1951年4月14日フランス・イタリア・オランダ・ベルギー・ルクセンブルクと、特にドイツの軍需産業をコントロールするために「ヨーロッパ石炭・鉄鋼共同体の創設に関する条約」を締結した。1952年に西ドイツはヨーロッパ防衛共同体（EDC）に、西ヨーロッパ連合（WEU）に、そして1954年には1949年4月4日に成立した北大西洋条約機構（NATO）に加盟した。1955年5月5日、西ドイツは西側勢力によって主権を認められた。1957年に西ドイツはフランス・イタリア・オランダ・ベルギー・ルクセンブルクと原子力利用についての条約、またヨーロッパ経済共同体についての条約を結んだ。

ドイツ民主共和国では1953年6月17日、蜂起がソ連軍によって鎮圧された。1961年8月

13日、西側境界にベルリンの壁が建設され始めた。1974年10月7日の憲法改正時に、憲法から「ドイツ民族」の概念が放棄された。

1989年8月、ソ連におけるミヒャエル・ゴルバチョフの改革政治（ペレストロイカ路線）に乗じて、鉄のカーテンつまり“ファシズムを防ぐための壁”のうしろに閉じ込められていたドイツ民主共和国の幾千もの住人はブダペスト・プラハ・ワルシャワにある西ドイツ大使館に、同じように、東ベルリンにある西ドイツの常設機関に逃げた。それに応えて、1989年9月10日、ハンガリーとオーストリアの両外相は両国境の鉄条網を針金用鋏で切って撤去した。それに続いてドイツ民主共和国では、自由を求め、民衆がデモンストレーションを始めた。

1989年11月9日には制約なしで出国できるようになった。1990年3月18日に新しい選挙法に基づき、民主共和国で自由選挙が実施され、キリスト教民主同盟を中心に構成された「ドイツ同盟」の、市民圧勝に終わった。

1990年10月3日にドイツ民主共和国は（ブランデンブルク、メクレンブルク-フォアポメルン、ザクセン、ザクセン-アンハルト、テューリンゲン州の[再]創設の下で）ドイツ連邦共和国に加入した。1990年9月12日にモスクワで両ドイツと戦勝4カ国とのあいだで締結された条約は、1945年以降事実上実施された地域の新たな分割を決定的なものとして承認したものであった。1990年11月14日、ドイツ連邦共和国とポーランド共和国とのあいだで両国間の国境が確認され、調印された。

1992年、12の諸国家（イングランド・アイルランド・デンマーク・スペイン・ポルトガル・ギリシアを含む）を土台に拡大したヨーロッパ共同体において、共通の国内市場が実現された。それら共同体は統一共同体、後にヨーロッパ連合（EU）になった。EUに1995年1月1日にオーストリア、フィンランド、スウェーデンが、2004年5月1日にはチェコ、ハンガリー、スロヴァキア、スロヴェニア、ポーランド、エストニア、ラトヴィア、マルタ、キプロスが加入した。一方で、リヒテンシュタインとスイスとは密接な関係にあるが、両国で住は、EU加盟は形式上拒否された。1998年には住民数の三分の二は加入を賛成しているが。

8 現在におけるドイツ語圏のラント

現在において、重要な連邦主義制で構成されているドイツ語圏の連邦州は、本質的には神聖ローマ帝国の領域を占めていて、以下の通りである。

ドイツ連邦共和国（35万7092平方キロメートル、人口8240万人）は、以下の連邦州、つまりバーデン-ヴュルテンベルク（州都シュトゥットガルト）、バイエルン（州都ミュンヘン）、ブランデンブルク（州都ポツダム）、ブレーメン（州都ブレーメン）、ハンブルク（州都ハンブルク）、ヘッセン（州都ヴィースバーデン）、メクレンブルク-フォアポメルン（州都シュヴェリーン）、ニーダーザクセン（州都ハノーファー）、ノルトライン-ヴェストファーレン（州都デュッセルドルフ）、ラインラント-プファルツ（州都マインツ）、ザールラント（州都ザールブリュッケン）、ザクセン（州都ドレーズデン）、ザクセン-アンハルト（州都マクデブルク）、シュレーズヴィヒ-ホルシュタイン（州都キール）、テューリ

ンゲン（州都エアフルト）そしてベルリンから構成されている。

オーストリア共和国（8万3871平方キロメートル、人口8260万人）は九つの連邦州、つまりニーダーエスターライヒ（1986年以降、州都ザンクト・ベルテン）、シュタイアーマルク（州都グラーツ）、ティロール（州都インスブルック）、オーバーエスターライヒ（州都リンツ）、ケルンテン（州都クラゲンフルト）、ザルツブルク（州都ザルツブルク）、ブルゲンラント（州都アイゼンシュタット）、フォアアルルベルク（州都ブレゲンツ）、ウィーン（州都ウィーン）から構成されている。

国のおよそ75パーセントがドイツ語を話すスイス連邦共和国（4万1285平方キロメートル、人口7480万人）は、26カントン（州）ないし半カントンから構成されている。それらはアールガウ（州都アーラウ）、アッペンツェル—アウサーローデン（州都ヘリザウ）、アッペンツェル—インナーローデン（州都アッペンツェル）、バーゼル—シュタット（州都バーゼル）、バーゼル—ラント（シャフト）（州都リースタール）、ベルン（州都ベルン）、フライブルク（州都フライブルク）、ゲンフ（州都ゲンフ）、グラールス（州都グラールス）、グラウビュンデン（州都クール）、ジューラ（1979年以降）（州都デルスベルク／デレモント）、ルツェルン（州都ルツェルン）、ノイエンプルク（州都ノイエンプルク）、ザンクト・ガレン（州都ザンクト・ガレン）、シャフハウゼン（州都シャフハウゼン）、シュヴィーツ（州都シュヴィーツ）、ゾロトゥルン（州都ゾロトゥルン）、テッシン（州都ベリンツォナ）、トゥールガウ（州都フラウエンフェルト）、ウンターヴァルデン・ニト・デム・ヴァルトおよびウンターヴァルデン-オブヴァルデン（州都シュタンス）、ウンターヴァルデン・オブ・デム・ヴァルトおよびウンターヴァルデン-ニトヴァルデン（州都ザールネン）ウーリ（州都アルトドルフ）、ヴァート（州都ローザンヌ）、ヴァリス（州都ジッテン）、ツーク（州都ツーク）、チューリヒ（州都チューリヒ）である。